虚業集団

清水一行

虚業集団（きょぎょうしゅうだん）

昭和四十三年五月二十日　第一刷

定価　三四〇円

著者　清水一行（しみずいっこう）

発行者　鈴木敏夫

発行所　読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一

大阪市北区野崎町七七

北九州市小倉区中津口七三の二五

製本　寿製本

印刷　大日本

© 1968 IKKO SHIMIZU

虚業集団

清水一行

読売新聞社

目次

1 罠掛け 5
2 不渡り 63
3 草刈り 133
4 追い落とし 183
5 葬式屋 237

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

カバーデザイン　中井幸一

1 罠掛け

重い吐息と共に、悄然と手洗いから出てきた民子の、血の気のない白い顔を、上条健策はぼんやり思い浮かべた——。

民子は、後ろ手にドアを閉めるのさえ精一杯といった恰好で、よろけながらベッドへ倒れこむ。

「マヨネーズの故だわ」

聞かれもしないのに、民子は激しい嘔吐の原因を、朝食の生野菜にかけたマヨネーズが悪かったと言いつくろった。

フィルターつきの煙草をくわえたまま、上条は、昭和通りに渋滞する車の洪水を見降ろしながら、悪阻に違いないし、それはもう疑う余地はないのだと思った。

この一週間で、三度も上条はそんな民子を目撃している。

五十二歳になる上条が、自分の女の悪阻に抱く異和感とは別に、二十二歳でしかない若い民子が妊娠すること自体、一向に不思議ではなかった。ましてや民子が、不貞を働いたというのではないのだし、五十二歳とはいえ、女に子供を産ませる能力は、上条にもまだあるはずだった。ところが民子は、どういう訳か、悪阻の事実を隠そうとしている。その態度が気に懸ってならない。

民子が上条を憎悪していることは、他の誰(だれ)よりも上条自身が一番良く知っていた。民子の立場から言えば、人生を台無しにされたも同然なのである。ましてや愛情からスタートした関係ではなく、上条が奪い、そして足かけ四年間、なおも奪いつづけている相手であってみれば、二十二歳の民子が、特殊な感情を抱かずにいるはずがなかった。

――隠し通して、こっそり処分するつもりかな

上条はそんなことも考えてみた。もし民子が、そうしてくれるなら、上条には願ってもない結果である。知らぬ顔で通すことに、上条も協力しようと思った。だが、思惑が外れて、逆の結果になったらどうするか。上条の気がかりの原因はそこにあった。憎悪している男の種を宿し、女は自分の胎内でその種を守り育て、産む気になれるものかどうか、その辺の微妙な感情は到底わからなかったが、憎悪している相手の子であるからこそ、かまわずに産んでしまうということも、あり得ないことではないはずである。

――五十二歳プラスX(アルファー)か

上条は無意識につぶやいた。上条の思惑が逆転し、もし民子がかまわず子供を産んでしまったと

して、その子供が成長し、ともかく自立して考え、行動できるようになった時の上条健策は、その時七十二歳になっているはずの老醜を、自分の子供にたいして弁明しなければならないのである。考えてみると、なんとも情なかった。

もともと上条は、家庭的な団欒というようなものには、まったく興味がなかった。そういう彼に、子供など迷惑千万な存在であったし、民子の母、的場仲子の思惑も一応は考えてやらなければならない。

――第一、死んだはずの人間が、人の子の親になれるか

浅黒い頬を引きつらせ、上条は自嘲した。ナンセンスである。死んだはずの男が女に子供を産ませる。もちろん入籍など思いも寄らないし、認知することもできないのである。自分が迷惑に思うだけではなく、産まれてくる子供も、屹度当惑するだろう。

その時、表で、突然激しい砂塵が舞い立ち、のろのろと切れ目のない列を追って進んでいた車の群が、一瞬にして黒い埃の膜に包みこまれた。

「会長、いいですか」

軽くノックして、半開きに押したドアから顔だけのぞかせた伊田祥三が、「池袋の阪元です」と告げた。

「ちょっと入ってくれないか」

「阪元は？……」

「まあいいから」
席に戻って椅子を引き、上条は憂鬱そうに伊田を見つめる。
「なにか……」
伊田はやっと室に入り、丸い顔を突き出した。
「民子なんだ、どうも悪阻らしいんでね」
言ってから上条は、濃いサングラスの中で、気まずそうに笑った。
「出来ちゃったんですか」
「間違いないと思う」
「で、麻布は産むとでも……」
「いや、当人はまだ悪阻じゃないって言い張っている」
「面倒ですね、何カ月に？」
「うん、せいぜい三カ月目の初めじゃないのかな。隠そうとしているんで、どうも気味が悪いんだよ」
上条が言うと、だから言わないことではないんだという表情で、伊田は吐息をついた。
「聞いてみたらいいでしょう」
「こっそり始末してくれるなら、聞かない方がいい」
「知れたら、洗足もうるさいことになりますよ。また死ぬの生きるのって……」

「産む気ならの話さ」
「もちろん麻布は例のこと、なにも知らないんでしょうね」
「死んだ人間か」
「ええ。実はおれは死んでいるんだ、死んだことになっている人間だって、いよいよとなったら打ち開けるしかありませんね」
「いよいよとなったらやるが……」
「別に、死んだはずだと言うだけで、当人は生きているんだからいいでしょう」
「他人事みたいに言うな、まあいい」
「じゃ、阪元を呼んでいいですか」
伊田が問い返すと「なにか拾ってきたのか」と、上条は大儀そうに聞いた。
「ちょっと大きいんです」
上条が「呼べ」というようにうなずくと、伊田はドアの前まで行って阪元に声をかける。額の禿げた阪元乙次は、勢い良く室に入り、「担保金融です」と言った。まだ三月にはいったばかりだが、道路に面した窓に陽が当たって、室内は暑いくらいである。
「ものはなんだ」
上条は、ほとんど唇を動かさずに聞いた。
上条は、贅肉のまったくない痩せた長身で、いつも濃いサングラスをかけている。もともと上条

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のサングラスは、中国大陸から引き揚げてきた当座の、占領軍の眼をかすめる目的でかけはじめたものだったが、それがいつの間にか、仕事にたいする徹底的な非情さを象徴する彼のトレードマークになっていた。

「里見重工です」

阪元は、肘掛けのソファーに坐って得意そうに答えた。金融業〈不二商事〉の触覚的な系列機関店の一つ、池袋の池信商事の社長阪元乙次は、上条輩下でも比較的仕事のできる幹部だった。

「里見重工って、二部へ上場している、あれか」

上条が聞いた。

「もちろんです。前に手形を二度ほど割っていますから、布石はしてあったんです。伊田社長、そうですね」

「百万円くらいのものを二つ扱いました」

「それでこの仕事が飛びこんできたのか」

「なにしろ里見重工の株券を黙って預けていったくらいですからね」

上条は長い臑をはね上げるようにして、机の角に片足をのせる。

里見重工は、東京証券取引所第二部市場に上場されている機械株で、運搬用起重機やウインチを製造、資本金は一億五千万円とすくなかったが、一応業績も安定しており、上場してからずっと年一割五分の配当を継続、最近は時流に乗った建築資材のアルミ・サッシュ部門へ進出すると伝えら

れていた。
「会長、これはひょっとすると、ひょっとした仕事になるかも知れません」
「変な日本語を使うな」
「そんなことはどうだっていいでしょう。これはぼくの勘なんです。行けますよ」
「おまえの勘なんかどうだっていい」
「厭だな、会長今日は機嫌が悪いですね。いいですか、二十五万株の担保金融ですよ」
「なに、二十五万株？」
「そうですよ、すこしは真面目に聞いて下さい。しかもですね、この株を持ち込んできたのは、その里見重工の社長の次男なんです。里見重工では常務取締役で、しかも経理部長、こんなにお膳立が揃っていても、ぼくは会長に怒鳴られるんですか」
阪元は皮肉っぽく言った。机から足を降ろした上条は、伊田を振り向き「里見重工はそんなに金が詰っているのか」と、阪元を無視して聞く。伊田は「最近の興信情報には、まだなにも出ていません」と軽く答えた。
「会長も伊田社長も、変に勘ぐらないで下さいよ。これ、とにかく見て下さい」
阪元はむっとして、抱えてきた風呂敷包みを小卓に拡げ、株券の一部を出し上条に手渡した。
「いいですか、新ですよ」
阪元が強調する。たしかに折り目も汚れもついていなかった。

「しかもです会長、その株の名儀、里見重工社長、里見北海になっているでしょう。注意して見て下さいよ」

言われて上条は慌てて名儀を見て

「おい、全部社長の名儀か」

と、さすがの上条も、驚いて阪元に視線を向ける。阪元はもちろんだと言うようにうなずき、資本金が一億五千万円なので、発行株数が合計で三百万株、そのうちの二十五万株だから、株数としてもまとまっていると説明した。

そのとき伊田が「疑うわけじゃないけれども」と念を押してから、「社長の名儀株を、発行数の一割近くも高利貸のところへ持ちこむっていうのは、なにかある証拠じゃないのか」と、言うと、阪元は「厭だなあ」と、禿げあがった額を白いハンカチで拭いてから「絶対に安心です」と言い切った。

「明日ばっさり倒産なんていうものを、持ち込んだりしません。ひょっとするとひょっとだって言ったのも、実は訳があるんです。この前の手形は確かに会社の金繰りでしたが、この担保金融は、いま言った社長の次男の遊興費なんです。間違いありません。はっきりそう言ったわけじゃありませんけど、会社にこのことが知れないようにやってくれるだろうなって、くどく念を押してましたからね」

「遊興費？」

「らしいんです」
「証拠はあるのか」
「いや証拠はありませんが」
「じゃ、わからんじゃないか」
伊田が畳みこむように聞くと、阪元は顔をしかめ「まだ疑うんですか」と聞き返した。
「疑うって訳じゃないけど、あんまり上手すぎる話っていうのは、用心してかからなくちゃならないんだ」
伊田は阪元を宥めるように言う。しかし阪元は伊田のその態度に腹を立て、「会長も信用できませんか」と、上条に向き直ったが、上条は、そんなことはどうでもいいというように「掛け目は」と聞き返した。
「まあ、奴は七だの八だのって言ってましたが、ぼくは二部株はせいぜい半分だって答えたんです。このところ株の相場は良かありませんから、時価は百十円になっています」
それでやっと阪元も気を取り直して答えた。
時価百十円で、五掛けの二十五万株、つまり五十五円掛ける二十五万株で、融資額は千三百七十五万円ということになる。
「その男、どうやって返すつもりだ」
「それはあるんです。草加の方へアルミ・サッシュの新工場を建設する予定で、その建設リベート

を当てにしている口ぶりでした」
「わかった、よし行こう。金を出してやってくれ」
上条は伊田を振り向いて命令するように言った。

担保の掛け目は五掛け、金利は日歩十五銭、期間は一応二カ月ということで、不二商事は金利及び手数料天引きで千二百十四万円を、里見重工常務取締役経理部長の里見勇次に貸し付けることになった。もちろん折衝の一切は、担保を持ち込まれた池信商事の阪元乙次がやるわけで、相手側には不二商事の名も、上条健策や伊田祥三との関連も知らせない。
「阿呆な伜を持つと、親も大変ですね」
伊田は阪元との打ち合わせを終え、金を渡して再び上条の室へ戻ってきた。
「そういうのがいてくれるから、こっちは商売になる」
「まったく」
「それはそうと、女に使う金かどうか、よく調べさせなくちゃいかんな」
「金を渡したら尾行をつけるそうです」
「それから里見重工の内容も」
「池信の方で興信所を使うそうですから」
「あとは株の情況か。二部へ公開した時の株数と、その後の浮動株を一応当たっておいた方がいい

ぞ」

上条が黒い眼鏡を光らせながら言うと、伊田は「叩きをやりますか」と、拳を振り降ろす恰好をした。上条はなにも答えず、ただ無気味に笑った。

上条健策の経営する〈不二商事〉は、名儀上伊田祥三を社長に据え、上条は相談役ということで金融業を表看板にしてはいるが、月並みな街の高利貸とは、その仕事のやりかたで根本的な相違があった。その証拠に、警察は上条たちを知能ギャングと呼んでいた。しかし上条健策はそれを硬派金融であると反論する。

『弱肉強食の原理に一番忠実な、金の威力の行使……』

それが上条のよく口にする言葉だった。

だから、金融業とはいっても、金を貸して金利を稼ぐことをあまり問題にしなかった。上条健策にとって、金利など実はどうでもいいのである。金利はいくら高く取っても知れたもので、仮に十日で一割という高利を取ったとしても、それで貸した金を二倍にするには百日の余もかかってしまう。上条に言わせると、高利を承知で金を借りに来る奴は、弱味のある証拠だ、そういう弱味のある相手を眼の前にして、たかの知れた厘歩を稼ごうというのは、金の威力にたいする冒瀆ではないか——。

つまり、これが上条の言う硬派金融の理念だった。それだけに、こういう考えに基づく不二商事に、足繁く出入りする上条の輩下は、種々雑多である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com